

誰もが人間として生きていくうえで 侵すことのできない当然の権利

子どもたちの人権作文

12月の人権旬間にあわせて、子どもたちが書いた人権作文をご紹介します。今月は3名の作品を紹介しします。

「平和について考えたこと」

蘇陽小学校

6年 興侶 優斗さん



6年生になりました。学校で授業であるおじいさんの写真を見ました。その人の背中には、大きな火傷のあとが残っていました。先生は、「どうして写真に写っていると思いますか。」と聞かれました。でもぼくは、どうしてかわかりませんでした。後でわかったことは、ひびくして、背中に火傷をおったことがわかりました。その後、修学旅行に行きました。資料館には、とけた六本のピンがありました。原爆はすごい力があるし、とてつもなく熱いということが分りました。そして、先生が話してくださった谷口さんの写真もありました。『とてつ

いいいちゃんといじいちゃん、戦争に行っちゃったよ。いじいちゃん、帰ってきたけどいじいちゃん、帰ってこなかった。それと家の近くに爆弾が落ちた。」と話してくれました。蘇陽にも爆弾が落とされたことを聞いてびっくりした話ばかりでした。もってびっくりした話ばかり。おとし亡くなったひいおばあちゃん、山にしたい取りに行ったら、飛行機からきかんじゅうでねらわれたこと。とつぜんじゅうでつたれて、おそろしかったと思います。もしも、ひいおばあちゃん、おとし亡くなっていたら、ぼくも弟もこの世に生まれていません。いじいちゃん、おとし亡くなると戦争にいったわけではないと思います。

ぼくたちは「今、平和かどうか」について考えました。友達の中には、「外国でも今でも戦争があっているから平和じゃないよ」と言う人もいました。しかし、ぼくは、友達と仲良く遊べるし、食べた物が自由に食べられるので平和だと思いました。戦争は何のためにあるのでしょうか、どうして悲しい思いをしなくてはいけなくてしょうか、人を人と思わなから、起こると思います。もし今戦争がおきても、ぼくは人を殺すことなんてできません。世界には、今も紛争や戦争があっています。ぼくは、この勉強をしてこの世に戦争は必要ないと思います。たくさんの方が死んでしまうこともないし、ひいおばあちゃん、おとし亡くなるとねらわれなくてすんだからです。ぼくたちが戦争の悲しみをわすれてしまったら、じょうだいさんたちが伝えてきたことや、谷口さんが、写真に写ったこと、えてきたことが、むだになります。ぼくは、周りの人たちの中でいじめをなくし、明るく楽しく過ごせるようにしていきたいです。そして平和な世界をめざしてみんなと助け合って成長していきたいです。

「五・三集會に参加して」

矢部中学校

1年 上田 駿さん



ぼくは五・三集會に参加しました。五・三集會では、矢部小や中島小、潤徳小、蘇陽小、清和中などが集まりました。ぼくが、五・三集會に参加した理由は、差別や偏見のことをこの集會で考えて、自分がおかしいことをおかしと気づき、言っているように思っていたからです。参加してみても、一番に残ったのは、解放子ども會の劇で、題は「残す」です。解放子ども會の人たちが学習してきた白山のこと、ハンストのこと、内大臣のことを発表してくれました。白山だけが道や水道を良くしてもらえなかったことに腹が立ちました。なんで白山だけが差別されないかと思いました。役場は国から補助金がでいたのに、それだまら、白山の人たちがそれに気づき、役場の前にハンストを命がけでしていたのに、聞こえなかったことにも、腹が立ちました。これは水俣でチソンの工場に水俣病の患者さんたちが訴えにハンストをしたことと同じだと思いました。内大臣のことでは、内大臣の山に昔、枯れ葉剤がまかれようとしたと発表がありました。枯れ葉剤はベトナム戦争のときにまかれ、森だけじゃなく人にも被害をあたらせたこと、森だけじゃなく、その枯れ葉剤が内大臣の山にまかれていたら今の山都町はなかったと思います。けど命がけで闘い続けてきた人たちがいるから今の山都町があると思います。それは水俣も同じです。水俣病と闘い続けてきた人たちがいて、訴えてきた人たちがいて、今の水俣があると思います。最後に劇を

山都町人権を考える 町民の集い

12月9日(水) 矢部保健福祉センター 千寿苑において山都町人権を考える町民の集いを開催しました。

本集いでは、町内小・中・高校生による人権作文の発表と毎日新聞記者の林田紀子さんによる「現代の部落差別」取材を通して見えてきたことと題した講演がありました。

子どもたちの人権作文は、人権学習や生活の中での気づき、人権に関する想いなどが発表されました。

講演では、京都府にある弥栄中学校における独自の人権教育に密着取材され、部落差別や家庭での問題等に向き合い成長していく子どもたちの姿とそれを支える先生の取り組みについてお話されました。

集會参加者は、子どもたちの作文発表と講演をそれぞれに自分の想いと重ねながら聴かれており、人権の重要性について改めて考える一日になりました。



人権作文発表の様子



講演される林さん

やった解放子ども會の人たちや何人かの人が、自分の残したものを一人一人発表してくれました。それを聞いて、ぼくも、リボン登校と人権学習、この五・三集會を残したいと思いました。なぜなら、リボン登校、人権学習、五・三集會があったから、おかしいと気付けたし、おかしいと言えるようになったからです。今年で五・三集會に参加して五回目になりました。けど考えたこと、思ったこと、感じたこと、おかし、あつてはならないことだとぼくは思います。差別や偏見をなくすためには、一人一人の考え方や言葉、行動について、しっかり考えていくことがとても大切だと思います。矢部中では毎月二十三日にリボン登校をしています。一人一人が差別や偏見について考え合う日です。とても大切なことだと思います。それが矢部地区だけでなく、清和や蘇陽、そしてもっくと広がってみんなで考え合える日になればいいと思います。そして五・三集會にも子どもだけではなく、大人もたくさん参加して、人権について考える一日になればいいと思います。ぼくは来年も五・三集會に参加しようと思います。自分のことを振り返ってみたり、聞いて思ったことは、どうしていくべきかを考えたりして、次に生かしていけるようにしたいです。

「知るこころいじい」

矢部高等学校

1年 岡崎 真実さん



山都町の小学校・中学校の義務教育を受けた人たちは、教科学習とともに「人権」についても学んできました。

残念ながら、私たちの今の生活の中では、いじめや差別は無くなっていません。いじめや差別が起きるのはどうしてだろうと私はいつも考えていました。そして一つの答えにたどり着きました。それは「知る」ということです。私が最近気になっているのは、若い人たちとお年寄りの接し方です。ある本を読んでお年寄りにも、色んな人がいると改めて思いました。お年寄りだから荷物を持ってあげなくてはならない。お年寄りだから何も出来なくても、仕方がない。そうではなく、〇〇さんが何ができて、何ができないかをきちんと知って理解することが大事だと思っています。いじめも差別も、相手に対して偏見を持ち、相手のことを知ろうともしないことが原因だと思っています。人は誰でもそれぞれに良い面、悪い面があるのが当然で、お互いにどれだけ相手のことをわかり合えているかが大事だと思っています。相手のことをわかっていけば、相手に対してイライラすることも減り、話をすればきっと仲良くなれると思います。若い人たちもお年寄りのことを知らないから関わりたくないと思ってしまうし、相手のことを知らずに、無意識のうちに勝手に決めつけ、嫌な人間になる人も少なくありません。

私の祖母は、よく周りの人から「怖くない」と言われます。確かに、怖い時もあります。普段はいつも笑っているし、私が農業の話をしてたら相槌を打ちながら聞いてくれます。それに、祖母が地域や地元の話を始めたら昔のおもしろい話をたくさんしてくれま。周りの人たちが知らないだけで、とても愉快な祖母だと思っています。私は、学校のことをよく家庭で話します。家族の中で一番学校のことを話せる相手は祖母だと思っています。昔の楽しい話をしてくれることだと思いま

す。若い人たちは、それを聞かずに、年寄りの話がわからないとか、勝手に決めつけてはなれていくのはすごくもったいないことだと私は思います。お年寄りでも、友達でも、話せば相手の良い所や好きな所をたくさん見つけられると思います。私が一番嫌だと感じるのは、噂を信じていじめをしたり、その人と関わらなくなってしまうことです。回りの色んな人と話ができるのは今しかありません。もしかすると、明日には、話したかった人が遠い所に行き、話すことができないかもしれません。後悔しても、もうその人の本当の気持ちや思いを知ることができなくなるかもしれません。誰も外見や噂ではその人を判断することはできません。その時に暗い表情をしている友達の外見だけでその人を判断することは、難しいと思います。よく知らないのに知っているような素振りや、人を見下したり、弱いと決めつけていじめたりする。そうではなく、きちんと相手を知る努力をして、自分の本当の気持ちを相手に伝え語ることが大切だと思います。友達と二人でコンコンと話し、笑っているのが私は許せません。一人で堂々と相手に言えるようになって、一対一でお互いに思いを語れる環境ができればいいと思います。

私は、十六年間家庭や学校で過ごしてきた、やっぱり人権が一番大事なのは一人ひとりが相手の人権を大事にすることだと思っています。多くの友達は、人権に関する講演などを毎年聞いて、その時はいじめや差別はいけないので気をつけようと思っけていて、暫く時間が経つとそのことを忘れ、自分自身のこととして捉えられないことがありません。なかなか、いじめや差別は完全になくならないけれど、本気で無くそうと努力するならば、やっぱり相手を大切に思い大事にするべきだと思います。そのために私は「知る」ことから始めたいと思います。